

“触覚”から考える造形表現
—二つのワークショップ実践からの考察—

小 笠 原 文

Study of “Tactile Sensation” on Artistic Work
—Reflections on Two Workshops—

Fumi Ogasawara

On July 23rd and 24th of 2013, Mr. Kojiro Hirose, who is an associate professor at the National Museum of Ethnology, was invited to Hiroshima Bunka Gakuin University to give a lecture and two workshops concerning his flexible, barrier-free “kyokatsushakai” theory.

Mr. Hirose proposed the possibility of relying on “tactile sense culture” as a method of intellectual search, which was independent of relying on only one’s visual sense. This concept of “tactile sense culture,” could have a number of possible applications for the field of education.

By sharpening one’s “tactile sense,” this helps us to gain more understanding about people who uses the “tactile sense”, which then develops our abilities to understand others. In addition, it opens the possibility of “self-understanding,” by going back to our primitive beginnings that is not based on the “visual sense” alone. In fact, during the early years of our infancy, we rely more on our “tactile sense” more than our “visual sense,” which relates to the origins of art itself. This paper introduces Mr. Hirose’s workshop which aimed at building a sensibility to understand others; a “self-understanding” of children; and thinking through rediscovery of the “tactile sense” and “art expression”.

キーワード

造形表現 Artistic Work, 触覚 Tactile Sensation, 他者理解 Understanding Others
幼児教育 Early Childhood Education

所属

広島文化学園大学 Hiroshima Bunka Gakuen University
学芸学部 Faculty of Arts and Sciences 子ども学科 Department of Childhood Studies

1. はじめに

2013年7月23日および24日の2日間、科学研究費事業の一環として、論者は国立民族学博物館准教授の広瀬浩二郎氏を広島文化学園大学学芸学部にお招きし、二つのワークショップ(ワークショップ1:「さわって、つくって、つたえて～指先・手のひら・全身で感じてみよう!～年長児を対象としたワークショップ, ワークショップ2: さわっておどろく「手学問のすゝ

め」大学生を対象としたワークショップ」と講演会「共活社会を創るーしたたかで、しなやかなバリアフリー理論の構築をめざしてー」)を企画・開催した。広瀬氏は視覚に頼らない知的探求の手法として「さわる文化」の可能性を追求し提唱する、日本宗教史と障害者文化論を専門とする研究者で、各地で「さわる」行為に着目した多くのワークショップや講演会を展開している。論者も2013年6月23日に開催された他者理解を楽しむワークショップ「うごい手、つ

くっ手、つたえ手～触覚がひらく身体のふしぎ～」(Dance&Peopleⁱ主催：広瀬浩二郎氏ナビゲーター：京都府大山崎ふるさとセンター)に参加した。アイマスクで視覚を遮り、モノに触る、匂いを嗅ぐ、体を動かすといった活動は実際に行ってみると、想像以上に戸惑いを伴うものであった。その感覚は、言葉がほとんど解らない上、地理感もない外国の路頭で、どこで買えるかも当ての無いモノを一人で探しまわるような不安感や倦怠感、焦燥感にも似ていた。広瀬氏の「さわる文化」という概念が実感として理解できたワークショップであった。

この「さわる文化」という考え方は、現代の教育・保育現場で必要とされる「他者理解」の心を育成する思考に通底するものである。

平成18年12月に国連総会で「障害者の権利に関する条約」が採択された。その中では「障害のある者となない者が共に学ぶことを通して、共生社会の実現に貢献しよう」といういわゆる「インクルーシブ教育(包括的教育)」の考え方が示されている。日本でも同条約の批准に向けて、平成23年8月に障害者基本法が改正され、「可能な限り障害者である児童および生徒が障害者でない児童および生徒と共に教育を受けられるように配慮」とされた。これらを受けて、中央教育審議会では特別支援教育のあり方について、報告書をまとめた。そこでは「特別支援学校と幼・小・中・高校、あるいは特別支援学級と通常の学級間での交流及び共同学習をいっそう進める」ことが求められている。障害のない子も幼少期から「障害」や人間存在の「多様性」を理解し、尊重する心を育て、将来の共生社会をつくるための基礎を培うためである。

広瀬氏は「目が見えない」ということを「障害を持つ人」と捉えずに、「視覚を使わないで、触覚を使う人」と考える。世の中には英語を使ってコミュニケーションを取る人もいれば、日本語を使ってコミュニケーションを取る人もいるように、視覚を使って、モノを見る人もいれば、触覚を使ってモノを見る人もいる。このような考え方は、「自分とは違う他者」の存在を認め、より良く理解し、共に生きるための心を育む基盤となるものではなかろうか。これらの考え方を子どもや学生の具体的な姿から検証していくことを目的として、今回、ワークショップを実施するに至った。

2. さわって、つくって、つたえて ～指先・手のひら・全身で感じてみよう！～

本ワークショップは2013年7月23日に私立なかよし保育園(社会福祉法人、愛児福祉会、広島市西区中広町)の年長児24名を対象として行われたものである。広瀬氏はキッズプラザ大阪ⁱⁱのプログラムなどで小学生以上の子どものワークショップには慣れているが、「未就学児は(広瀬氏にとっても)チャレンジ」ということであった。

2.-1 ワークショップ対象児の状況

ワークショップを実施した社会福祉法人愛児福祉会なかよし保育園は1974年に乳児保育園として広島市西区に開設され、1990年には開園当初からの願いであった就学前までの保育を実現した。2001年に「高陽なかよし保育園」、2004年に「口田なかよし保育園」が開園し、広島の保育運動や保育内容の向上に大きく貢献している。めざす子ども像としては①健康で明るく活動的な子ども②「自我」を膨らませ、自立心をもった子ども③思ったこと、考えたこと、感じたことを表現できる感性豊かな子ども④確かな「みる力」「きく力」「考える力」「創造する力」をもった子ども⑤友だちと一緒にの生活を楽しみながら、人との関わりを学び、連帯していく力を持った子どもの5点を掲げている。1歳児クラスから始まる班活動、七頭舞やエイサー、アイヌ民謡などの郷土芸能を取り入れた身体表現活動や音楽活動、保育士と子どもが1対1で行い「子どもの話に耳を傾ける描画活動」等、特色のある意欲的な保育に取り組む保育園である。

対象となった年長児クラス「おひさま組」は男子12名、女子12名の計24名。担任の後藤幸子保育士は保育士歴7年、本保育園を卒園し、「大好きなかよし保育園で保育士として働く」という幼少の頃からの夢を叶え、熱意と信念を持って職務にあたる保育士である。現在の年長児クラスは、後藤保育士が0歳児クラスから持ち上がり、保育士と子ども達および保護者との間には確かな信頼関係が築かれている様子が伺える。いわゆる「グレーゾーン」の子どもはいるが、加配の保育士を必要とする障がい児はいないクラスで、基本的には後藤保育士の一人担任に加えて、6時間勤務のパート保育士が補佐に入っている。ワークショップの実施にあたり、広瀬氏の計画を後藤保育士が確認し、子ども達

が広瀬氏の来園とワークショップに対して見通しを持ち、楽しみに待つような導入を前日までに数回行った。また、後藤保育士は完全な暗室での活動も可能であるという判断をし、前半はアイマスクを使用してのアイスブレイク、後半は暗室の中での活動という流れが決定した。

2. - 2 ワークショップの目的

本ワークショップには大きく2つの目的があった。第1はワークショップを1回で完結するものと捉え、ワークショップ終了時に子ども達が「獲得するもの」としての目標である。具体的には、保育所保育指針に、おおむね5歳では「異なる思いや考えを認め（中略）仲間の中の一人としての自覚が生まれる」、おおむね6歳では「仲間の意思を大切にしようとし、役割の分担が生まれるような共同遊びやごっこ遊びを行い（中略）取り組もうとする。（中略）思考力や認識力も高まり、自然現象や社会現象、文字などへの興味や関心も深まっていく」という子どもの姿が挙げられているが、「視覚を使わない状態で活動する」という「想像を絶する」体験を通して、「異なる思いや考え」「仲間の意思」「思考力や認識力」などについて子ども達がさらに深化していくことが期待できる。

第2は本ワークショップを論者の研究「幼児教育における造形表現プログラムの開発と実践—フランスにおける事例とその応用」を検証するための実践の「導入」としての位置づけである。論者は2006年9月から2007年6月までフランス南西部、アーキテーヌ州ペリグー市にあるサン・フロン小学校で行われた「弱視・盲目の子どものために、クラスで絵本を制作する」プロジェクトに参画した。このプロジェクトは、「幼児教育の中でも、芸術（表現活動）教育と障がい児教育を統合させるフランス教育特有の手法」を用いて行われたものである。日本の幼児教育の現場でも今日求められている「造形による自己表現」「造形による他者理解」のリテラシー育成のために応用、展開するために、当該のプロジェクトを事例としてとりあげ、日本でも実施し、それらを国際的連携・比較のなかで検証・評価し、幼児教育における造形教育（表現活動）の新たな可能性を示唆するという研究である。具体的には、フランスでの実践同様に、子ども達が「視覚に頼らず、触って認識する絵本を制作する」ことが最終目的であるが、そのために「視覚に頼らない」ことについて理解す

る必要がある。本ワークショップでは実際に視覚を遮ることで、子ども達が「見えないこと」と「見えること」について実感を伴いながら考えていくことを第2の目的としている。

2. - 3 活動の流れと子ども達の反応

時間	活 動	主な発言・反応
前半 9:30-10:00 アイマスク	<ul style="list-style-type: none"> ・班ごとにテーブルにつく。 ・広瀬先生 自己紹介。 ・目が見えなくて困ること、できないことについて考える。 ・広瀬先生が杖を使って歩く姿に感嘆する。 ・手を叩いて広瀬先生を班の所に呼ぶ。 ・「わーっ」と大きな声を出してみてくださいの指示⇒ <p>【アイマスク装着】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アイマスクをして班の人と手を繋ぐ。 ・自己紹介「名前 & 好きな食べ物は何？」 ・もう一度大きな声を出してみてくださいの指示⇒ ・さっきと違う？ <p>【アイマスクを外す】</p>	<p>「ご飯食べれん?」「トイレは?」「自転車に乗れん」</p> <p>「うわーっ」 (大声)</p> <p>うまく手が繋がらない。「こっち、こっち」 名前を呼び合う</p> <p>「うわーっ」 (大声)</p> <p>「うーん」「たしかに違うかも」</p>
後半 10:00-11:00 暗室	<ul style="list-style-type: none"> ・隣の部屋に移動 ・班ごとにテーブルにつく。 ・テーブルの上にはクロスで覆われたものが置いてある。(中は野菜) ・消灯し、暗室にする。 ・野菜を触る。 ・粘土で野菜をつくる。 ・餡を配る。食べる。 ・電気をつける。 ・粘土でつくった野菜を見る。友だちのつくったものを見る。黙々と粘土を続ける子ども若干名。 	<p>「これ、何?」 テーブルの上のものに興味津々</p> <p>「わー」「きゃー」 (泣き出す子ども数名) 「トウモロコシ!」 「カボチャ!」 (大騒ぎ)</p> <p>「あ、イチゴ味!」 「これ、何の味なん?」(大騒ぎ)</p> <p>「わー、眩しい」 (大騒ぎ) 「見て、見て」</p>

図1 ワークショップの流れ



写真1 目隠しをして班の人と手を繋ぐ。なかなか思うように繋がらない。声を掛け合いながら繋いでいく。



写真2 目隠しをして「うわーっ!!」大声を出してみる。見えているときに出した大声と同じ? 違う?



写真3 真っ暗闇にする部屋に移動。テーブルの上にはクロスが掛けられ何があるのかは分からない。



写真4 真っ暗闇の中で触覚を頼りに野菜や果物を粘土で造った。

2. - 4 今後の展開

対象となった園児たちは、本ワークショップを導入と位置づけ、「触れる絵本」の制作へその活動を展開していく。子ども達が乳児の頃より親しんできたアイヌ民話「オキクルミ」について、「広瀬先生に伝える」という目的を明確にした上で、場面の選択、素材の選択、制作という順序でおこなう。

3 さわっておどろく「手学問のすゝめ」

本ワークショップは2013年7月23日と24日、広島文化学園大学学芸学部子ども学科および音楽学科の学生を対象として行われたものである。23日はアイマスクを使用して行い、24日はほぼ同じ内容を暗室の中で行った。

3. - 1 学芸学部子ども学科20名を対象としたワークショップ：目的と概要

本ワークショップは論者が担当する子ども学科2年生の授業「保育内容（造形表現）」の1コマを利用して行った。この授業は保育士資格もしくは幼稚園教諭1種免許状取得希望者が履修するもので、本年度はグループAに17名、グループBに26名の履修者がいた。ワークショップに参加したのは、グループAの16人であった。（男子学生5名、女子学生11名、欠席1名）将来、保育士もしくは幼稚園教諭を希望している学生が対象ということで、総合保育・包括的教育についての学生の意識を向上させることが、今回のワークショップの最大の目的であった。

ワークショップの流れは、以下のようなもの

である。①アイマスクをして視覚を遮る。自己紹介。「今朝、起きて最初に触ったもの」を言う。②広瀬先生から順番にオブジェを手渡される。そのオブジェを触り、言葉で説明する。人の説明を聞いて、自分も同じモノを持っていると思う人は挙手する。③オブジェの交換。隣の人に自分の持っているオブジェを渡す。④「音に触る」レインスティックの音を聴き、想像したことを述べる。平家物語を聴く。⑤「匂いに触る」写経をするときに手を清めるお香（塗香）の匂いを嗅ぐ。匂いからイメージをする。⑥「手で触る」国旗カードに触る。点字表に触る。⑦アイマスクを取ってオブジェや国旗カードを見る。

使用したオブジェ・音・匂い

- ・野菜と果物（メロン、ジャガイモ、かぼちゃなど）
- ・ハッキーサック（グアテマラの蹴鞠）・プラニー（マリ共和国のおもちゃ）・フクロウの置物（ペルー）・健診球（中国）・カリンバ（ジンバブエ）
- ・レインスティック（南米）・平家物語（金田一春彦）・塗香

3. - 2 学生の反応

Q1 今日のワークショップに参加して、おもしろい！ と思ったことを書いて下さい。

- ・普段、視覚に頼っている部分が多いため、急に見えなくなると、何をするにも不安を感じてしまったが、逆に見えないことによって想像する楽しみが味わえた。(S.I 男子)
- ・視覚を使わないで、触覚だけでモノを判別する時、見るだけでは感じることでできない「不思議感」がおもしろかった。普段は何も感じないことに對して、自分なりの「発見」があり、おもしろかった。(Y.K 女子)
- ・視力が使えない状態でも、モノに触れることで理解したり、音で判断したり等、普段の環境と違った体験ができておもしろかった。(K.K 男子)
- ・完全に目が見えない状態で、触るだけでモノの形を考えたりすることが、新鮮で楽しかった。今までは見えている状態でしかモノを触ることをしなかった。今回の活動では、知っている感触から様々なモノを想像できるのがおもしろかった。(S.U 男子)
- ・視覚がない状態で触覚や聴覚を使うことは、視覚がある状態とはまた違っておもしろかった。触覚を使うことは、その素材の質が分かるのが良かったが、それだけではモノを当てることは出来ないと思った。アイマスクを取って、モノ

を確認したときに自分の想像していたモノとは全然違っていておもしろかった。聴覚は視覚の有無に関わらず、変わらないと思っていたが、みんなの自己紹介を視覚が無い状態で聴いてみたら、いつも聞いている声とは何か違って聞こえたのがおもしろかった。(M.K 女子)

- ・視覚を遮り、手でモノを触ったり、耳で音を聴いたりして、日頃使わないものを使った気がして、おもしろかった。渡されたモノを細かいところまで手で触り、何なのかを当てたいと思いながら触っていたが、全然分からなかった。目を使わないと、こんなにも物体の正体がわからないものだということがおもしろかった。

(T.S 女子)

- ・アイマスクをして、手の触覚だけでおもちゃを触って当てるということをしたが、おもしろかった。目が見えるなら、これは何の素材で中に何が入っていて、どのような使い方ができるか分かるけど、視覚を使わない場合、素材も「多分、プラスチック（木材）」など。およその想像でしか当てられない。しかし想像してみる前には「分からない」と思っていたモノでも、しばらく触っていると少しずつ分かるようになってきて、楽しくなった。(S.K 女子)
- ・視覚を使わず、触覚で様々なモノを当てたり、想像したりしていくことはおもしろいと感じた。聴覚についても同様で、「川」「海」「水」の音というように想像をしていくのは楽しく、視覚を使わなくても感じられることがたくさんあることが分かり、おもしろかった。耳や手を使うことで、目で見ることでは気づかないことがあることを知り、驚いた。初めての体験ばかりで楽しかった。(R.G 女子)
- ・アイマスクを使って視覚を遮り、視覚以外の感覚のみで1時間授業を受け、触った感じや匂いなど、普段はあまり気にかけていないことを通して色々感じることはおもしろいと思った。(E.K 女子)
- ・視覚を遮ると、普段一緒にいるみんなの声がいつもと違うように感じたり、今まで思わなかったことを感じたりすることができた。色や模様などは全く分からないけど、肌触りや音など感じるものがたくさんあり、視覚を遮った作業は怖かったけどおもしろかった。(A.S 女子)
- ・1時間視覚に頼らないで「想像」をしたことがおもしろいと感じた。目の見える多くの人には「当たり前」なことや「見て判断する」ということが通じない世界について少し考えた。常識を当てはめないことで、大人の自分たちでも、目で見える以上に想像が豊かになるということに関心を持った。(G.S 男子)
- ・視覚を使えなければ、触覚や聴覚を最大限に使うとするもので、モノを触るとき必死で考えた。国旗のカードを触ったとき、国旗を目で

見るときとでは印象が違い、同じ国旗とは思えない。同じモノでも視覚情報と触覚情報では印象がかなり異なることが分かり、おもしろかった。色々な方法で、色々な角度からモノをみるのが大切だと感じた。(A. K 女子)

- ・視覚って頼りないと感じたこと、人の声が視覚を塞ぐだけで違うように聞こえたこと、触覚も頼りないと思ったことがおもしろかった。

(K. U 男子)

- ・手で触ることでは、自分の目の前にあるモノを判断できず、見えないものに触るということが少し怖くもあり楽しくもあった。触るだけでモノの質感や色など、自分の中で想像が広がっていくのがおもしろかった。目隠しをして聴く声は、いつも聞いている声とは違っておもしろかった。(A. O 女子)

- ・視覚を遮断して音を聞いたり、モノを触ったりしたときに、音はいつもと同じ感じで聞くことができたが、モノを触るときは、それがどんなものでどのような形をしているのか、それはどういった役目を果たすのか、それはどこの国のモノなのかを考えておもしろかった。触った感じだけなのでワクワク感やドキドキ感が増したように思う。(M. M 女子)

- ・普段触ることのない外国の楽器を手の感覚だけを頼りに認識していくことは本当に難しく、おもしろいというより、目の見えない方の苦勞が少し理解できた気がする。(A. O 女子)

Q2 今日のワークショップで「発見」したことを書いて下さい。

- ・でこぼこで国旗やモノを見極められることに驚いた。(S. I 男子)

- ・人は本当に視覚に頼って生活しているということがよく分かった。点字でひらがなだけではなく、数字やアルファベットも表示できるというのには驚き、発見であった。(Y. K 女子)

- ・視覚という機能が使えないと、他の機能が働いてくれるということが体験して分かった。

(K. K 男子)

- ・目が見えなくても、周りの人が動いたことなどには気付いた。他の人の動きを観て、予測するという事はできないが、歩いている時の音や、気配(風や匂い)でだいたいの場所が分かるというのが意外だった。(S. U 男子)

- ・触覚には触覚にしかできない役割があるということが分かった。視覚だけだと、「ツルツルしてそう」など推測しかできないが、触覚だとその物の情報がより明確になる場合もある。視覚が遮られると、音に敏感になり、カメラマンの足音が怖く感じた。広瀬先生が物にぶつかっている様子がなくて、すごいと思った。

(M. K 女子)

- ・目隠しをして、手を使って物を触ることはとても神経をつかうということが分かった。自分はかなり目に頼っていることを実感した。触覚でモノを認識するとき、今まで気にしていなかった手触りや形を改めて感じた。目を隠し、聴覚、嗅覚、触覚を働かせてモノを理解するとき、自分が想像力を働かせていることを感じた。

(T. S 女子)

- ・視覚を失うことは歩行やいろいろな活動をするときに怖いと感じるけど、それを補うことのできる触覚と聴覚があることを知った。(S. K 女子)

- ・視覚を使わず、物を触るということは普段はしないことで、今回は手で触ることで色や素材を想像した。いつもは見た上でどんなものなのかを人に伝えるが、視覚を使わずそれを伝えるのは非常に難しいと発見した。聴覚だけでどんなものを想像するということはしたことがなかった。どんな形か、何の音なのかを考えていくことは初めての体験だった。手で触ることで、国旗を当てることができるなんて、すごく驚き発見だった。目を使わなくてもたくさんのことを発見することができると分かった。(R. G 女子)

- ・気かけないで触れているものでも、じっくり触るといつもは気がつかない小さな変化が感じられた。当たり前のようにつかっている目は、自分が生活する中で大事で重要な役割を果たしていると感じた。五感それぞれを大切にしたいと思った。(E. K 女子)

- ・目隠しをしていると模様や色は分からないけど、普段とは違う部分を「見る」ことができた。目が見えないのは不便だけど、悪くはないかもしれないと前向きな考えを持つこともできた気がする。(A. S 女子)

- ・聴覚に関して、視覚を使わず耳だけを頼りにすることは、目を使って聞くよりも集中でき、必死に聞こうとする自分がいた。そのためか、私語の多いメンバーなのに必要最小限の事しか話していなかった気がする。広瀬先生が声から人の場所が分かってすごいと思った。「ありがとうございました」の挨拶にすかさずこちらを向いて下さって、この授業を受けて良かったと思った。(G. S 男子)

- ・普段人にものを伝える時、「色」「形」「大きさ」を主に伝えていることに気がついた。視覚を使わず、聴覚と触覚だけで人にものを伝えるとき、色や模様が分からないので何を伝えれば良いか迷った。私たちは目からの情報を多く使って生活していることに改めて気がついた。(A. K 女子)

- ・視覚を遮ると隣の人との距離感が分からなくなった。触ったものを説明するのが、想像していたより難しかった。嗅覚が意外と頼りになった。(K. U 男子)

- ・見えないということが怖かった。しかし聴覚、触覚、嗅覚など、他の感覚がいつもより鋭く働

いていたように思った。生活の中で、意識をしていなくても様々なものに触れ、匂いを嗅いで、耳で聴いてきたから、「木の触り心地」「甘いにおい」「海の音」と例えることができるのだと思った。見えなくてもたくさんのことが感じられた。(A. O 女子)

- ・声だけの自己紹介では、毎日声を聞いている人は顔が浮かんでくるが、あまり馴染みのない人は顔が浮かばず、誰だか分からなかった。(M. M 女子)

- ・目の見えない方は点字を触る指先と全身のバランス感覚が大切と思っていたが、嗅覚も使って「これは〇〇だ」と感じるができるというのは発見だった。点字は読めないが、国旗を触った時、指の感覚を頼りにするということを少し発見できた。(A. O 女子)

Q3 一番印象に残ったことは何ですか？

- ・水の音が出る道具が印象的だった。目で見えない分、音でそのイメージや思い出がよみがえってきて、心が落ち着いてきた。(S. I 男子)
- ・「視覚が使えない」ではなく「視覚を使わない」という先生の言葉が印象に残った。使えないとマイナスに考えればそれまでだけど、使わないと考えると「他の方法でやってみよう」という感じでプラスになっていくということが、他の事柄にも共通すると思った。プラス思考の大切さを改めて感じた授業であった。(Y. K 女子)
- ・触れるだけでモノを理解するのがこんなに大変なこととは思わなかった。(K. K 男子)
- ・目隠しをした状態で、渡されたものを想像して、特徴を掴んで説明すること。普通だったら色や模様を伝えるが、触った感触や形だけで説明するのは難しかった。他の人の説明も触ったら分かるだろうが、聞くだけではしっくりこなかった。全盲の方はこんな感じの生活をしているのかと思うと、違った世界を感じた。(S. U 男子)
- ・最も印象に残ったことは海の音のようなもの。きれいな音で、余韻が残る感じが好きだった。どの辺で音が鳴っているのか分かりにくかった。本当は雨の音をイメージしているということを知って、最初は海の音にしか聞こえなかったのに、雨の音にも聞こえるようになったのがおもしろかった。国旗を当てる場面では、私はオーストラリアだったのだが、触覚では判らなかった。アイマスクを外したらパッと判ったので、見た目で覚えていたと実感した。触覚や聴覚を研ぎ澄ましてみて、改めて感じる事や考える事、たくさんの発見ができた。貴重な体験だった。(M. K 女子)
- ・広瀬先生が机や椅子の配置、人がどこにいるのかをある程度頭に入れて授業をしているのだと思い、それが印象に残った。国旗や点字など、

自分が触っても全然判らなくて、その世界を生きて、目の見えない人を目の当たりにしたことが、一番印象的だった。(T. S 女子)

- ・点字や国旗を触ったことが一番印象に残った。点字は小さくて読み取りにくく、目の見えない人の触覚の敏感さはすごいと思う。(S. K 女子)
- ・印象に残ったことは、紙の凹凸で判る国旗。触覚で国旗を表すことが出来るとは驚いた。私の国旗には星が書かれていたのだが、複雑な形をしているのに、触って判って感動した。(R. G 女子)

- ・当たり前に使っている視覚を遮り、目で物を見ることのできない環境はすごく不安で、見える「ありがたさ」を感じる事ができた。視覚を遮られた状態で色々判断し、生活している方はすごいと思うと同時に、そういう方が困っている場面などでは力になりたいと思った。(E. K 女子)

- ・印象に残ったことは最後に広瀬先生と話したこと。先生と話すことで、点字についても興味を持つことができた。目が見えない人と関わる事が無かったので、新しい考えに出会えた気がした。目が見えないということは、不便だと思うし、辛いことだと思うが、見えないからこそ感じることもあるのだと改めて感じた。(A. S 女子)

- ・音か声で特定することは無理でも、それに近いものをみんな想像できていることが印象に残った。サボテンの茎を使って雨の音を出す物に対し、自分は雨が何かに当たる音だと思い、みんなも「波の音」など水に関する音を想像できていた。触ったモノを説明する時でも、モノが分からなくても、同じモノを持っていることは特定できることが印象に残った。(G. S 男子)

- ・隣の人からモノを渡されるだけでも苦戦していた学生に対して、広瀬先生は一人一人にモノを渡して回り、発言してほしい人の所へ行き指名していた。何を頼りに歩いているのだろうか？目隠しをした自分は歩くなんて考えられなかったが、余裕があり、楽しい会話を入り交えながら授業をなさった先生が一番印象に残っている。(A. K 女子)

- ・点字を触ったことと、レインスティックの音を聞いたとき、実際に水を入れ物に入れて振っていると思ったけど、実際に見てみると違ったことが印象的だった。聴覚も曖昧だと思った。(K. U 男子)

- ・「目を使えない」ではなく「目を使わない」という話が印象に残った。今まで多くのものを目で見てきて、それがなくなると考えると怖いのが、それをマイナスに捉えるのではなく、プラスに捉えることでたくさんの可能性に繋がっていくと思った。これから出会う「目の見えない」「耳の聞こえない」子どもたちの可能性を広げられ

るような、プラスパワーを持った保育士になりたいと思った。(A.O 女子)

- ・触覚や聴覚だけでは分からないこともたくさんあるし、自分が今どんな人とかかわっているのか、不安になったり怖くなったりすることもあると思われるが、広瀬先生は何も恐れることなく、私たちの前で堂々と講義をなさっていて、目が見えなくても出来ることがたくさんあるということを教えてもらえたことが一番印象に残った。点字を触ったことも印象に残った。

(M.M 女子)

- ・授業全てが印象に残った。小・中学校で点字を触る機会や、バリアフリーについて調べたりすることはあったが、今回、実際にアイマスクをしての活動は怖かった。今回は座ったままであったが、実際は外を歩いたり、予測のつかないものを触ったりすると考えると、相互理解が必要だと感じた。(A.O 女子)



写真5 目隠しをしてオブジェに触る。日頃はあまり馴染みのない民芸品に触り、用途や素材を想像する。



写真6 国旗カードに触る。目で見ると一瞬で判る国旗も、触ってみると…

3. - 3 学芸学部音楽学科30名を対象としたワークショップ：目的と概要

本ワークショップは学芸学部音楽学科の授業「音楽療法概論」履修者を対象として行った。この授業は本学学芸学部音楽学科の狩谷美穂講師（音楽療法士）が担当する授業で、音楽療法士1級資格取得のための必修科目である。多角的にものごとを捉える能力が求められる音楽療法士であるが、本ワークショップは「闇を通して触ることの奥深さ」を実感することによって、「障害を持つ人」について日頃抱くイメージを新たな視点から考え直すことが目的となっている。

ワークショップの流れは3. - 1 学芸学部子ども学科20名を対象としたワークショップに記したものと基本的には同じであるが、相違点として子ども学科ではアイマスクを使用したが、音楽学科では暗室の中で行ったということが挙げられる。

3. - 4 学生の反応

アイマスクとは違い、「遮られていないのに、見えない」暗闇体験は、学生に強いインパクトを与えたようであった。当日はテレビカメラが入るということもあり、完全な暗闇を作る努力をしたものの、僅かな光の漏れから、目が慣れてくるとうっすらとモノが見え始めてしまうという状況があった。学生の感想に、「目が慣れてきて、見えてしまうのが残念だった」という言葉があったように、「視覚を使わない心地よさ」や「視覚以外の感覚を働かせる喜び」を体感した学生の姿があった。以下はワークショップの一部を抜粋したものである。

広瀬先生：「無理なく視覚を使わない、使えない状況をつくるにはどうしたら良いかということで、真っ暗闇にします。(中略) 不便さよりも視覚を使わないというところから出てくる開放感、自由みたいなものを味わって下さい」

(消灯)

学生：「わー！」「おー！」「すごーい」「何も見えん！！」

広瀬先生：「多分この中では僕だけ、暗闇になっても全然変わらない」(一同笑い)「最初にこれからみなさんに触っていただくものは普段みなさんが良く知っているものです。はい。」(果物を手渡す)

学生：「はい、(受け取る) あっ、エー、ヒイー (悲鳴・笑い)」

広瀬先生：「怖いものではありません」

学生：「何これー（笑い）」

広瀬先生：「次に皆さんに触ってもらうものは、今度は少し違います。多分あまり皆さんが知らないもの。」（民芸品を手渡す）

広瀬先生：「良く知っているもの、例えば、野菜や果物を触るときと、あまり知らないものを触るときを比べると、おそらく触る方法が違うと思います。今、みんなが触っているものはあまり見たことがないようなものだから、より触覚に頼って観察することになります。これは何だろうということを深く想像しながら触って下さい。」

4. 触覚から考える造形表現の可能性 ～まとめにかえて～

造形表現（美術）を行う者、言い換えれば図画工作の時間に制作を行う子どもから造形美術を生業とする造形作家に至るまで、彼らが制作過程で最も頼りにしているのは通常は「視覚」であろう。芸大美大を目指す高校生の集まる予備校では「よく観て描け」というフレーズが掛け声のように繰り返される。

一方、美術というものは「表面的な表現」が否定的なものとされるように、「不可視」の領域をも表現する分野であり、「視覚」の能力だけでは全うすることのできないものである。当然、そこに必要なのは「すべての感覚」を働かせることであるが、視覚優位の現代社会に於いて、視覚以外の感覚が忘れられ、日常的に使われないことによって、「使いものにならない」という美的な表現を試みようとする者にとっては悩ましい状態になってしまっている。特に「触覚」に関する感度の低下は著しい。

ここで、「原初的なもの」に立ち返り「触覚」について考察する。一例として、先ず挙げられるのは「子どもと触覚」である。幼稚園の創設者で幼児教育学の先駆者として知られる Fr. フレーベル（1782-1852）は「われらをして子どもに生かしめよ！」と述べ、子どもを「真性にして根源的な」存在と見ているが、乳児の行動を観察すると、非常に「触覚的」である。乳児のいる家庭では「触らないで！」という言葉が（乳児が言葉を理解しないことは解っている）発せられる回数は高い。言葉を理解する幼児になっても、「触らないで！」の使用度は高く、それらのことから、子どもは「モノに触って認識しようとする」傾向が顕著であることが判る。

また、イタリア初の女性医師で、障がい児の治療教育から始まった感覚教育法を確立したことでも有名な M. モンテッソーリ（1870-1952）は「触覚の敏感期」には、さまざまな感触を楽しむ時期で、子どもが自身の手で触りながら様々なモノの抵抗度の違いを確かめているときに脳も刺激されると述べている。

二つ目の例として挙げられるのは原始美術である。ここでは、ヨーロッパ後期旧石器時代の洞窟壁画のひとつ、フランス西南部のドルドニュ地方にあるルフィニャック洞窟を取り上げたい。この洞窟壁画は今から約1万5千年前に描かれたもので、マンモスを始め、ビゾンやサイ、馬、野生ヤギなど250以上のイメージが描かれているが、そのうちの半数がマンモスである。マンモスがモチーフとなっているものは旧石器時代芸術全体で10%にも満たないことを考えれば、この割合はルフィニャック洞窟の特殊性を示すものと言える。

そしてこの洞窟の不可思議さは、これらの絵を「描く困難さ」にある。この洞窟は全長8キロメートルにも及び、壁画が描かれた洞窟としてはヨーロッパ最大級のものである。現在では見学のためにトロッコのような電動のミニ電車を用いる程である。行き止まりの所で、見学者は初めてトロッコから降りる。高くはない天井を見上げると、「大天井画」と呼ばれる単色で描かれた動物たちのイメージが現れる。二酸化マンガで描かれた黒い線に迷いはなく、「巧み」という言葉がよく似合う。しかし、これを描いたアーティストは、自分の描いたイメージ全体を「観る」ことはなかった。つまり、現在は調査や見学のために地面が掘り下げられた結果、これらの絵を「見上げる」訳であるが、当時はこの「天井」と「地面」の間は80センチメートルしかなかったことが判っている。おそらくアーティストは仰向けに臥した状態で描いたと思われる。洞窟の入り口から1キロメートル以上も奥まった、迷路のように入り組んだ場所までランプと描画の道具を手に腹這いのような姿勢でやってきて、描く。この壁画は誰かに「見せるため」に描かれたものではなく、描いた本人も「視覚」にほとんど頼れない状態で描いたという事実を示しており、人間の芸術的な創造活動が「視覚優位ではない」ことを語っている。

広瀬氏は「目が見えない」ということを「障害を持つ人」と捉えずに、「視覚を使わないで、触覚を使う人」と考え、一つの文化として捉え

る。「触覚」を再発見することは、子どもの「自分とは違う他者を理解する」心を培い、さらには自己の存在の根源的なものへ回帰する「自己理解」へと深化していくことが考えられる。これらを造形表現の中で、子ども達が実感的に獲得できるような実践を試みていくことが、今後の課題である。

【参考文献・参考資料】

「ロマン主義」, 所収「教育思想辞典」, 教育思想史学会 (編), 2000年, 勁草出版
 広瀬浩二郎「さわる文化への招待－触覚でみる手学問のすすめ－」, 世界思想社, 2009
 マリア・モンテッソーリ, 武田正実 (訳)「創造する子供」, エンデルレ書店, 2000
 小笠原文, 「原初的なものを通して子どもに伝えられるもの」, 2013年, 広島文化学園大学学芸学部 子ども学論集 創刊号, pp. 111-120
 小笠原文「子どもと造形表現－フランス初等教育における学級プロジェクト：『触れる絵本』の制作に関する一報告」, 小笠原道雄 (編)「進化する子ども学」福村出版, 2009第11章164頁-180頁

大場幸夫(監修)「保育所保育指針ハンドブック」学研, 2008

「ザ・ドキュメント#93 世界に触れ！－見える人にこそ伝えたい－」2013年9月14日放送 関西テレビ

i Dance&People

「多様な身体性の出会いとやりとりの場を作り、そこから新しいダンスやダンスを超えた可能性を開拓していくこと」を目的とした京都に所在する任意団体。地域をベースにしたワークショップ、公演を目的とした創作ワークショップ、公演、施設などでのワークショップ開催、ワークショップの派遣を行っている。

ii キッズプラザ大阪

日本初の本格的なこどものための博物館。「こどもたちが楽しい遊びや体験を通じて学び、創造性を培い、可能性や個性を伸ばす」ことを基本理念に、1997年7月にオープンした。